

第4章 侍セレナーデ

1941年春、民主主義諸国が日本の太平洋への意図について疑惑始を感じ始めた頃、皮肉っぽい伊藤述史情報局長が、外国人居住者と、特に、特派員と外交官を、彼らの栄誉をたたえるために、情報局の事務所が入っている劇場（**帝国劇場）でのコンサートに招待した。戦時中の制限下で娯楽を渴望していたコミュニティーにとって魅力的な演目が用意されてあった。大集団はこれに反応し、確保されていた桟敷はほぼ満席になった。英國大使のロバート・クレイギー卿と夫人は最前列の真ん中の特別席に案内され、その両側には日本の高官が立っていた。

コンサートは殆どが封建時代の侍と、その後の、ナショナリストに愛された日本の古典音楽で成り立っていた。日本帝国で最も素晴らしい古典音楽家で、盲目でありながら優れた演奏家である宮城道雄が箏（13弦のハープ）を演奏した。もう一人の熟達者による三味線（3弦のバンジョー）の奇妙な憂鬱な音が劇場を満たした。最後の演目では私が今まで聞いた日本の現代音楽のうち、最高な音楽で、約100人の児童混声合唱団による壮大なカンタータだった。このカンタータは日本の神話的な支配者である神武天皇の東方遠征に捧げられていた。

コンサートが始まる前にホストの伊藤博士が舞台に登り、我々がここに呼ばれた理由を説明した。最初はフランスの政府高官からも高く評価されるほどの完璧なフランス語で語った。そのフランスからは、その数日前にインドシナのフランス植民地ほぼ全てを奪った後、その一部をタイに譲渡してあった。その後、ロバート・クレイギー卿からも高く評価される英語で語った。英國の極東領は日本が次に奪う予定だった。どちらの言語でも彼は、世界が戦争と混乱に陥っている中で、日本人は静かに、落ち着いて行動しており、コンサートを開催することで、あらゆる外国人に喜びを差し上げることが出来ると述べた。

外交官の何人かと、聴衆の殆どは、このスピーチはカンタータのように安心を感じた。新聞記者の多くにとってはこのスピーチは三味線が不快を感じさせたように、冷笑的に聞こえた。伊藤がコンサートを開催している間に、そのコンサートには代表としてクレイギーを出席させている大英帝国の終焉をたくらむために、松岡外務大臣はヒトラーに会いにベルリンに急いでいた。そして、松岡が留守中にも、東京の日本海軍はアメリカと戦う戦略の検討が継続されていた。これは神武天皇の直系の子孫である裕仁のもとで、神武天皇の東方遠征が継続されていたことになるであろう。

このコンサートは、日本の軍国主義者たちがひそかに招待者のいくつかの国を破壊する計画を継続する一方で、日本が平和的意図を持っている証拠として提供した唯一の公式エンタ

ーテインメントではなかった。数年前から日本人は世界を侍の音楽で世界を眠らせようと、短波ラジオで24時間、八方向の隅々まで放送していた。海外に配布されている出版物の広告には「あなたにもっと力を」のキャッチコピーで、海外のリスナーに「聴き易く、いい番組を、長時間」提供するために、ラジオ東京の設備が拡張されると発表した。

この拡張は1941年の初めに実施され、それは軍国主義者の計画の拡大が開始された時期でもあった。南太平洋地域は将来の軍隊作戦の舞台であり、ラジオ東京が毎日、英語、オランダ語、フランス語、中国語（三つの方言）、マレー語、タイ語、日本語と、現地の方が理解できる、多くの言語で毎日、放送すると発表した。南西アジアと極東では将来の作戦領域になる可能性があり、ラジオ東京はビルマ語、ヒンディー語、アラビア語、英語、フランス語と日本語の番組を毎日提供した。ホノルルに基地があることが知られているハワイにも、英語と日本語の番組が毎日送信された。この他、特にヨーロッパ、中南アメリカ、北アメリカ東部、北アメリカ西部、南アメリカ、オーストラリアとニュージーランド、そして最後に中国に対しても適切な言語で毎日送信された。

世界はラジオを聞くよう招かれたが、日本向けの番組で返答することは許されなかった。なぜなら、誰もそれを聞くことができないからだ。ラジオ東京の運営費を支払っている皇民は、短波受信機の使用が禁じられた。ラジオ東京が自らを名乗る「Voice of Japan」は海外で聞くことができたが、海外の声を日本で聞くことは全て違法だった。理由はいくつかあるが、最も重要なのは、ラジオ東京は海外のリスナーだけでなく国内のリスナーも管理できるということだった。こうして、軍国主義者は、「退廃した民主主義諸国」や反体制的なソビエトの思想が、神話に支配された臣民の心に侵入することを許そうとはしなかったが、その一方で、港を通じて国内に持ち込まれたあらゆる自由思想を粉碎するために、あらゆる努力を注いだ。

多くのスタッフが日本から世界へのラジオ番組制作のために訓練された。日本放送協会（NHK）の近代式に建物に、日本政府機関が運営しているラジオ東京が入っており、この建物から地球の異なる国々のアナウンサーが、それぞれの言語でそれぞれの人々に語った。しかし、そのテーマと内容は、外国人のリスナーが悪い印象を持たないように、日本当局者によって検閲され、切り替えられた。建物には宿泊室があり、東京から夜間に適切な印象を伝えるメッセージを発信して、地球の反対の昼間に受信させることもできた。

ラジオ東京は、独自の番組のほかに、国営の同盟通信社のニュースを放送し、外国が最も聞きたがる歌を流した。民主主義諸国には平和の話が、枢軸国には戦争での緊密な協力をほのめかす話が、南太平洋地域には、彼らが大東亜計画から忘れられてはいないという保証が放送された。真珠湾攻撃の日が近づくと、ラジオ東京はハワイに万事順調であり、島々は暖か

い砂浜と波打ち際で海水浴を楽しむことができると保証した。最後の太平洋平和内閣が総辞職したまさにその日、米国とハワイの新聞は次のような同盟の報道を掲載した。「近衛文麿首相の内閣は本日総辞職した。外交評論家は、『これは日本がドイツを支援するために対ロシアの動きの前兆であるのに違いない』との見方を示した。」

ロシアとの戦争は良いとして、民主主義諸国との戦争は馬鹿げた話だ！ホノルルは同盟通信社の言葉を真に受けた。もし、同盟通信社のことが信頼できなかったら、日本の新たな外務大臣である東郷重徳の言葉を信じれば良かったのだろうか。彼が述べた「日本の目的は世界平和の促進と維持である」はアメリカを至る所で引用されていた。こうして、ラジオ東京は平和の歌で、将来の日本による爆弾の被害者になる人々の判断を誤らせ、危険を発信しようとしていた東京の外国人特派員の言葉をしばしば無効にさせることに成功した。

日本はメッセージを海外に伝えるのに、全てをラジオに依存していたわけではなく、外国人にも頼っていた。日本は学校を傀儡の育成の他に、宣伝活動員と親善商人の育成のために建てた。外務省は数千ドルを使い、数千人の教師を日本に連れてきた。彼らは子供の様に手を引かれて、本物の日本の美しいおとぎの国を経験した。カラフルな日光東照宮から荘厳な古都京都を案内され、彼らは魅了され、今まで見たことのない世界を眺めて魔法をかけられた。彼らは魅了され、魔法をかけられたまま、横浜に戻され、快適な日本の最新定期船に乗って、米国の大小の学校の机に戻り、彼らの児童、生徒に日本の素晴らしさを教えた。

日本人は常に自分は宣伝が下手だと文句を言っていた。最もうまく宣伝する方法は、この文句をしつこいほど言い続け、外国人に日本人は宣伝が下手だと思い込ませることだった。日本人にとって、宣伝が下手だと言われるほど心地よいことはなかった。彼らは、こう言われるの宣伝が上手くいっているのだと確信していた。そして、外国の学校教師の効果においては、優れた差別意識を示した。子供は親からの話よりも学校教師からの話の方を幅広く聞き入れることを確認した。各教師は何年もかけて、何百もの感受性の強い心に接することが可能だった。小学校の教師は、子供の心に、大人になっても忘れる事のない思考を植えつけることで、日本の繊細な作法と素晴らしさを高く評価する最良の宣伝活動員を作り上げることが出来た。

外務省は、日本の文化や言語に興味を持つ学生たちを温かく迎え入れた。外国人留学生向けの教育を提供する特別な学校が設立されたが、その一方で、感性を刺激し、感覚を和らげたい人には、生け花や茶道の秘訣を学ぶコースも開かれた。個人指導を希望する人には、適切な日本語教師とテキストが提供された。

日本人の生活の良さを海外に知ってもらうために、外務省は日米学生会議を奨励した。この

会議は、何年にもわたって、日米の学生が日米で交互に開催されていた。また、国際文化振興会の日本支部がニューヨークのロックフェラー・センターにあり、日本から海外への情報で好印象を与えるのに特に役立っていた。振興会は 1940 年に、世界規模の日本文化を主題としたエッセイコンテストを後援した。コンテストは公募で、優勝者には一等賞として、日本へのファーストクラス往復旅行と 3 か月間の滞在費 3 千円、二等賞を取った二人に、日本へのファーストクラス往復旅行と 1 か月間の滞在費 1 千円、三等賞を取った複数の方に、日本で出版された書籍 500 円分が用意された。振興会は、期待されているのは「最高の結果を得るのは北米地域、特に米国の・・・」と発表した。

(**<https://iscdc.org/about-us/>

History & Alumni

Our history dates back to 1934, when the first Japan-America Student Conference (JASC) organized in response to deteriorating relations between the U.S. and Japan. Students from Japan invited their American counterparts to Tokyo for in-depth discussions about timely issues, working together toward the goals of mutual understanding, friendship, and trust. In the following year, American delegates reciprocated the hospitality by hosting a second meeting in the United States.

JASC continued to take place every year until the Second World War. The Conference was revived in 1947 by American and Japanese students then living in Japan. After a second interruption in the mid-1950s, the 16th JASC was held in 1964 in the U.S. and has alternated between the U.S. and Japan every year since. Read more about the history of JASC.

In 1979, JASC, Inc. was incorporated as a non-profit organization in Washington, DC, providing continuity and support to students and alumni of the Conference. In 2008, we expanded to become International Student Conferences, Inc. (ISC) and launched the Korea-America Student Conference (KASC). Based on the model of a student-run Conference, KASC has answered the call for closer ties between young people in the U.S. and Korea.

Aoyama Gakuin College

Many alumni of the Conferences have gone on to distinguish themselves in business, academia, and government. Most notable among them is Kiichi Miyazawa, the former Prime Minister of Japan, who participated in the 1939 and 1940 Conferences, and Henry Kissinger, the former U.S. Secretary of State, who participated in the 1951 Conference. A partial list of prominent alumni is available upon request.

ISC maintains significant amounts of historical information in the form of publications, photographs, travel memorabilia, correspondence, et cetera, archived as an archival collection of the University of Maryland in College Park.

Page is under construction! Check back later for more conference archives!

https://kjass.net/jasc-japan/65_report_0.pdf

日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである。」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生教会(日本国際学生協会の前身)を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4名の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名(うち22名は大学教授、およびその夫人でオブザーバー)の米国側代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国(当時)への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以降1940年の第7回会議まで、以下の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。

第3回(1936年)早稲田大学。第4回(1937年)スタンフォード大学。第5回(1938年)慶應義塾大学。第6回(1939年)南カリフォルニア大学。第7回(1940年)津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

(終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は1947年に再開し、第8回を迎えることとなった。)

このような気前の良さは学生に対してだけではなかった。日本は外国の新聞社とライターと親しくすることに価値があることを知っていた。彼らは、日本郵船の豪華客船の片道のファーストクラスの無料券を受けるか、或いは、彼らの全ての旅行費用を外務省が負担した。また、この豪華客船は改造されて海軍の予備船としても造船されていた。訪れた新聞記者は大日本帝国の招待客であり、彼らには楽しく、愉快な出来事が保証されていた。日本郵船発行の月刊誌にはこのような招待客の写真が数多く掲載されていた。日本以外の国からは日本は非友好的なプロパガンダをやっていると見られているが、そんなことは全くなく自分自身で知るために招待された幸せそうなアメリカ人のカップルの写真の下に、典型的な説明文が書かれてある。彼らの名前は非公開のほうが良いだろう。「S夫婦は横浜からロサンゼルスへ浅間丸に乗り、太平洋を横断した。S夫人はニューヨーク市では有名な女性レポーター。彼らは外務省の公的支援で日本、満州国、中国の視察として招待された。」この写真の下には別のカップルの写真があり、男性はニューヨーク市では有名な出版者だと記されてある。同じページには大島浩の写真も載っていた。彼はベルリンの日本大使で同盟締結に尽力し、これが日本外務省の招待客の国への攻撃に至る要因になった。

こういった写真は何年も掲載され、この写真でポーズをする人々は、絶え間なく西半球から横浜へやってきた。日本はこの冒険に賭けていたが、過ちを避けるために抜け目もなかった。日本政府が外国人の旅行費用の全額、或いは半額を負担することで、その出費は右上がりだったが、このお金で善意が生まれ、民主主義諸国からの反感を鈍らせることが出来ることを考えれば、この投資には十分な見返りがあった。

アメリカ人は冒険と見知らぬ場所への愛着から、東洋のロマンチックな魅力に特に弱い。アメリカ人にとって、日本をほとんど、または、まったく費用をかけずに訪問するという申し出を断るのが難しいように、後で日本が美しい国であり、日本国民が全て軍国主義者というわけだはないという事実を否定するのも困難だった。日本は、この弱点を利用して、自分たちの長所を利用して短所を隠した。日本への偏見に満ちた間接的な話に頼るのでなく、日本を訪れ、自らの目で日本を判断するよう勧めることは、十分に理にかなっているように聞こえた。しかし、そのような理にかなったことの中に不幸が潜んでいた。

訪問者は、数週間の間に、日本、満州国、中国へと慌ただしく公的に案内され、通常の訪問者は国際問題に関わる場面を見ることは殆どなかった。その代わりに、たくさんの美しさと異国情緒に感銘を受けていた。日本の外国人をもてなす方法は、朝早くから午後遅くか、夜まで続く観光スケジュールを組ませ、夜は、疲れて、頭は混乱し、興奮した気持ちで迷路の中を泳ぐ状態で、他のことを考える時間を与えないというものだった。日本は印象的な寺院、カラフルな着物、心優しい臣民に自分の思いを語ってもらうことを好んだ。プロパガンダ用の書物は不要だった。日本の最大なプロパガンダは国民の中にあった。彼らの奇妙な風習、生魚、紙の家、木の靴、二股の靴下と神道の神社によって、外国人には楽しい感覚が生まれ、翌日の旅行の準備の前には、感覚麻痺になっていた。

日本はこの楽しい混乱状態に、加えるべきなのは、政治的、経済的な話題ではないことは分かっており、その代わりに、彼らは中国に対しては如何に平和的な意図があるのか、そして、抑圧された中国人を、如何にして日本人と同じレベルまで元気づけているのかを説明する準備を常に持っていた。しかし、通常は、時間的に、このような退屈な事柄が話題になることはなく、同様に、国の生活水準と健康水準の急激な低下、食事・衣服・燃料の不足、物価上昇、長時間労働、日中戦争による夫や子供の喪失、政府の軍事独裁、職場の封建的独裁、宗教の精神的独裁などの詳細についても退屈で話題にはなることはなかった。

旅のひと休みで、外国人は、帝国ホテルに豊富な食べ物があるのを見たが、日本人がここで食事をとることはなかった。また、コットンのシャツが旅行者と外交官だけに提供され、日本人は主に彼らを快適にするために従事していた。外国人は様々な錦織、骨董品、美術品、宝飾品が置かれ、選ぶことが出来たが、日本人には、これらは「贅沢品」とされ、「緊急事態」であるため所持すべきではないとされ、もはや、購入が禁止されていた。日中戦争で、すでに数年経っているのにかかわらず、明らかな失業も、不満の兆候も、戦争に特徴的な兆しも見られなかった。

アメリカに帰国するまでに観光客の頭の中に残っていたのは、日本人は極めて親切で礼儀正しく、美しい土地に住んでいることであって、彼らがそれまで、親中国派「プロパガンダ」から受けていた、日本人は野蛮な人々だという想像とは全く違っていたということだった。それが日本人が彼らに抱かせたかった印象であり、置かれた環境で彼らが持ち帰ることができたのはほぼこれだけだった。それはまったく正しかったが、裏切りに悪用された。この観光客が帰国したときに起こったことは、混乱しながらも楽しい異国情緒あふれる印象と、刺激的な体験をさせてくれたホストへの感謝の気持ちが、無意識のうちに彼らの中に、旅行とはほとんど関係のない国際問題で日本人を擁護する傾向を生んだということだった。観光客が受けた日本人についての正直な印象が、日本のために不正直に利用されたのだ。これ

が、外務省が外国人観光客をもてなすために多額の予算を割く目的だったが、この目的のために寄与したことで如何に有効であったのかを実感したのは、日本だけだった。

日本の侵略政策の結果、米国内の反日感情が高まり続けると、日本はためらうことなく、米国民に直接介入した。特定の地位にあることが米国で知られている日本の官僚と実業家は、無償で親善演説を行った。大谷登は、日本郵船の社長で、日本郵船は短波ラジオで東京から米国へたくさん放送していた。彼は「ですから、我々国民は、是非とも、友人であるアメリカ国民に分かって欲しいのは、我々が、我々の意志に反して、余儀なく日中戦争に至ったということです」と演説した。これが日本郵船の親会社である三菱が発する、軍国主義者的一方的な攻撃を正当とする声であった。しかし、三菱の日本郵船の社長は単に、日本の攻撃を正当化するだけではなかった。彼はアメリカの実業家に二つの根拠で訴えた。一つは、日本の中国への戦争は、実際には、ボルシェヴィキへの戦争であり、これが明白にアメリカ人に嫌悪感を引き起こそうとしていること、二つ目は門戸開放の原則に基づき、極東の貿易拡大を保証するためということだった。しかし、この三菱の代弁者は日本兵士が門戸の門番であり、誰かに勧められた通り、この門戸を開けるのは民主主義者が去るときのみであることに言及することは出来なかった。

もう一人の介入者は元ワシントンの日本大使館の参事官で、その後は外務省報道官になった須磨弥吉郎である。日中戦争の勃発後間もなく、日本政府のプロパガンダの使命を受けて自由な小旅行として、米国にやってきたが、同じことをアメリカ人が日本でやろうとしたら、日本政府は驚いていただろう。東京が行なっている伝道者のやり方は、短波ラジオで行われている方法と同様だった。日本は工作員を海外に送るが、日本滞在中の外国人が国民と自由に会話することを禁じ、一通方向の状態だった。言葉が辛辣で気の利いた須磨は1937年から1939年の二年間、東洋での出来事についてのアメリカ人の考え方に対して、徹底的に反論し、ワシントンから帰国すると、東京のアメリカ人特派員に対して、言葉で戦っていた。彼はアメリカ中を巡り、大学、クラブ、協会で何千もの純真なアメリカ人に対して、講義した。

須磨さんはオハイオ州のクリーブランドの外交政策協会の学識のある会員に「中国は實際には国家ではなく、むしろ「伝統」あるいは「過程」である。・・・四千五百万年の間、中国は暴政であり、これは民衆が受け入れる唯一の政治形態である。」と述べた。この政治形態はまた、日本が中国人に受け入れて欲しい唯一の政治形態でもあった。なぜなら、日本が第一に考えていたのは、中国の軍閥を交代させることであり、このことを中国人が十分に理解した時に、早いうちにその全権力を日本の侍の子孫に移行するために必要だったからだ。

「中国人に必要なのは、法と秩序である」と須磨報道官はクリーブランドの聴衆に述べた。「日本に反する論拠の多くはでっち上げられており、例えば、我々は、世界征服などは考え

ていない。」アメリカの民衆は「八紘一宇」のことは知らず、真珠湾攻撃もまだだった。須磨が滑らかなセレナーデを終わらせ、着席すると、聴衆は彼に拍手を送った。このセレナーデの内容は、真珠湾攻撃後にハル国務長官に送られた文書を上回る「重罪に値する嘘」であった。

しかし、合衆国は自由国家であり、宣伝活動者の須磨は自由に宣伝歌と共に巡った。ある晩、ペンシルベニア州ルイスバーグのバックネル大学の公演で、須磨は歌った「現在の（戦争の）問題は日本と中国が腹を割って話し合えば、解決されるに違いない。これが我々の政府が西側諸国からの、さらなる抗議に気に留めようとはしない理由である。疑いなく、中国は人口が四億人、領土はヨーロッパほど広大であり、自国でやっていけるはずであり、もし、出来ないのならそれはだれの責任なのか。」疑いなく、ハワイは人口数千人、南太平洋地域は人口何百万人、インドは人口何百万人以上、これらは自国でやっていけるはずであり、もしできなかつたら・・・。

恐らく、須磨が最も成功したのはデトロイト経済クラブでの公演であろう。ここで彼は会長の温かい歓迎を受けた。司会者は須磨の講演を紹介する際に、アメリカも国境を広げるために武力侵略に訴えてきたことを指摘した。（これは日本が「八紘一宇」政策を追求する侵略を正当化するためにプロパガンダで繰り返し用いた議論である。）その後、会長は次のように述べたとされている。「日本が目的を達成するために、どのような手段を講じるにせよ、日本はおそらく私たちの理解を超越した理想主義に突き動かされており、それが日本の生活、宗教、存在に浸透していることは間違いない。」須磨が、大日本帝国政府が提供し、費用を負担しているいつもの宣伝を終えた後、会長は再び次のように述べたと伝えられている。「我々デトロイトの人々は、今日、西側同盟国の困難の一つについて、おそらく初めて真の議論を聞いた。注意深く聞いていれば、前世紀に我々が直面した多くの問題が今世紀の日本も直面しており、我々が自国の問題を解決したのと同じ方法で解決しなければならないことがわかるだろう。つまり、我々は正しかったときは武力によって、疑問があったときは外交によって解決されたのである。」

須磨は外務省報道官になり、彼自身が東京の特派員たちに彼のアメリカ講演の本を配布した。私はこの本を読んで、この著書が、あるアメリカ人であることが信じられなかった。日本が中国の民衆に対しても兵士と同じように、情け容赦なく攻撃した後、アメリカ人や西側で教育された人が、公的な集まりで、日本人が、自ら分かってもいない、理想主義に突き動かされているのだと真面目に受け入れ、これが正しいことだと他人に勧めたことが信じられなかった。そして、アメリカ人を限りない征服を計画した独裁軍事主義国家の同盟者として呼ぶのは侮辱であり、これほど侮辱した日本人はこれまでおらず、がさつで犯罪に値した。

しかし、須磨の歌が聞かれなくなることはなく、大日本帝国政府の資金が無駄ではなかったことを証明した。私は須磨報道官のことを東京でよく知っており、母国語ではない言語で外国人を騙す彼の才能に感心した。

恐らく、須磨以上に日本のプロパガンダを普及したのは、多数の白人アメリカ人であろう。彼らは日本マネーを受け取り、私なら考えられないが、自国を裏切った。彼らの多くはアメリカ政府関係者で、そのうち何人かは太平洋戦争勃発に伴い逮捕された。しかし、彼らを逮捕しても、彼らによる損害を整復することは出来なかった。彼らは既に日本の悪魔を手助けし、この悪魔がアメリカの考え方を、日本とは純真な友人関係か無関係だと変えた。このことによって、日本は極東で、10年間、邪魔されずに武力攻撃を安全に行うことが可能になった。これらのアメリカ人は雑誌に投稿し、時には東京国際文化交流協会から供給されたフィルムを持参しながら、アメリカ中を講演していた。また、文化資料の形で日本のプロパガンダを配布する代理店を運営していた。

1941年、ルーズベルト政権がついに日本に対して圧力をかけ始め、アメリカ国民が眠りから目覚めると、日本政府が多額の資金を費やしてきた親善は徐々に打ち消されていった。東京はアメリカ人訪問者をもてなす政策を放棄し、その愛情をラテンアメリカに移し、米国内で確保することができます困難になってきた原材料の供給源をラテンアメリカから引き出そうとした。

ラテンアメリカとの関係を強固にするために、メキシコ、アルゼンチンなどの様々な国々の経済政府高官を日本に無料で招待した。いつものように、日本の接待は極端に太っ腹で、通貨の円を自由に使わせ、訪問者に日本の新秩序は正しいことだと感じさせた。アルゼンチンの外務省の貿易部門長で、訪問派遣団長でもあるカルロス・トリアーニ博士は日本人と大日本帝国を惜しみなく称賛した。「我々が訪問した地域についての新たな知識を生かして、我々が目撲した出来事をアルゼンチンの人々に教え、貿易と良好な関係を促進するよう、直接、尽力したいと思う」と、彼が満州国と占拠下の中国と朝鮮への旅行から戻ったときの談話として、報道された。

しかし、日本人に対する称賛と賞賛をもっと公然と表明していたのは、1941年8月末に親善大使として日本に連れてこられた2人のメキシコ人ジャーナリストだった。メキシコの有力週刊誌「ホイ」のオーナー兼編集者のホセ・パジェス・レルゴと、ホイのスタッフの一人であるアイザック・アライサだ。発行人のレルゴは、予定されていた日本、満州国、中国への3か月の旅が終えるのを待たずに、日本への愛情を明らかにした。日本に到着直後、ジ

ヤパン・タイムズ・アンド・アドバタイザー紙は、彼が東アジアにおける日本の取り組みに全面的な理解と共感を表明したと報じた。記事によると、米国は「財政的圧力」でメキシコを圧迫しており、それが「メキシコ人が米国に対して抱く共通の憎悪の原因」であるとレルゴが語っている。ラテンアメリカは間違いなく枢軸国寄りであると、訪問中のこの発行人は語った。彼のインタビューは、「訪問者が明らかにした、メキシコの日本との友好とアメリカ支配への国民の嫌悪」という見出しで出版された。このような発言は日本人にとって耳に心地よく、友好的なメキシコへの新たな希望を呼び起こした。しかし、太平洋での日本軍の攻撃の直後、ホイに掲載された漫画は編集者リエルゴの発言で日本人が期待したほど日本人に好意的なものではなかった。

たとえ、日本の主義への西半球の忠誠心が疑わしかったとしても、さまざまなアジアの国々の忠誠心はより強固になっているように見えた。東京には、タイ、ジャワ、インドシナ、インド、さらにはアフガニスタンから集められた多くの学生と教師がいる。日本式で養成されたインド人が彼の同胞に、「西洋の支配」から解放され、マレー、ビルマ、タイ、中国と連合して日本と共同戦線を組むべきだと訴えたとき、それは天皇に忠実な臣下が語っているかのようだった。

このセレナーデは、西半球の民主主義諸国を感動させ、彼らに太平洋地域は安心だという誤った感覚を与えるという目的を果たしたが、今では侍が三味線を弾きながらアジア諸国の抵抗を麻痺して進行している。